



Data

監督：侯孝賢（ホウ・シャオシェン）
 出演：王晶文（ワン・ジンウェン）
 ／辛樹芬（シン・シューフェン）
 ／李天祿（リー・ティエンルー）
 ／林陽（リン・ヤン）
 ／梅芳（メイ・ファン）
 ／陳淑芳（チェン・シュウファン）
 ／賴徳南（ライ・ドウナン）
 ／林于竝（リン・ユービン）
 ／張復欽（ジャン・フーチン）
 ／楊麗音（ヤン・リーイン）

👁️👁️ みどころ

侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督の最高の傑作『悲情城市』（89年）の重さ、痛さとは正反対の、甘く切ない青春映画を懐かしく温かい思いで鑑賞。

田舎から都会に出てきた若い男女の姿には、誰でも自分の初恋をダブらせるはず。私は思わず日活の青春映画『美しい十代』（64年）を思い出したが、台湾が日本と大きく異なるのは兵役の義務があること。

2人の恋が実らなかったのはそのため、といえはウソになるが、故郷に1人戻った青年の胸に今行き来するものとは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■侯孝賢監督の「青春4部作」の2本を今！■□■

侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督と言えば、何と言っても『悲情城市』（89年）の印象が強烈だった（『シネマルーム17』350頁参照）。また、『百年恋歌』（05年）（『シネマルーム13』93頁参照）、『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』（07年）（『シネマルーム20』258頁参照）も良かった。さらに、最新作の『黒衣の刺客』（15年）はアイパッドで中国語版を観たので全部は理解できなかったものの、これもすばらしかった。そんなホウ・シャオシェン監督の「青春4部作」と呼ばれている、『風櫃の少年』（83年）、『童年往事 時の流れ』（85年）、『冬冬の夏休み』（84年）、『恋恋風塵』（87年）のうち、今般『冬冬の夏休み』と『恋恋風塵』の2本が世界初のデジタルリマスターで劇場に蘇ることに。

『冬冬の夏休み』は幼い兄妹のある夏休みの物語。『恋恋風塵』は幼なじみの男女の淡い初恋とその破綻（？）の物語だ。いずれもセリフに頼るのではなく、淡々と人物と風景を

追っていくカメラの映像から物語を「感じる」映画だが、鑑賞後はなぜか心が洗われ、懐かしい昔に戻った気分ですぐにいっぱいになる。もっとも、『冬冬の夏休み』は懐かしい思いだけが残るが、『恋恋風塵』は誰でも自分の体験した初恋を思い出し、それと突き合わせながら観てしまうため、その結末の切なさには少ししんどくなる面も。もちろん、それは『悲情城市』を鑑賞した後の、ぐったりと疲れきったしんどさや無力感とは全然異質のものが・・・。

■□■中高時代に観た日活の青春映画を彷彿！■□■

1949年に松山で生まれた私は、1961年～1967年までの6年間の中高校生時代に、吉永小百合、浜田光夫を中心とした日活の青春映画をいっぱい観た。その中に、三田明の大ヒット曲を映画化し、西尾三枝子が映画初出演した『美しい十代』（64年）があった。これは吉永小百合、浜田光夫主演の『キューポラのある街』（62年）と同じような（？）、貧乏な若者たちの淡い青春の物語だった。

弁護士生活が42年目となり67歳となった今とは社会の状況が全然違う思春期に、そんな映画を観ていた時の感覚を、私は今でもよく覚えている。しかして本作のスクリーン上で、田舎から台北の都会に出て

働いている若者アワン（王晶文（ワン・ジンウエン））と、その幼なじみの恋人（？）アフィン（辛樹芬（シン・シューフェン））が織りなす物語を見ていると、その時と全く同じ感覚を思い出してくる。私自身は松山の幼なじみとの淡い恋が育つことはなく、大阪に出たところから全く新しい恋が始まったが、さてアワンとアフィンの恋は・・・？

■□■台北での暮らしは？久々の里帰りは？■□■

スクリーン上を見ていると、アフィンは洋服屋で働きそれなりに安定しているらしい。しかし、アフィンより1年前に台北に行き、夜間学校に通いながら働いていたアワンの方はかなり大変そう。アワンは今、ボロクツに怒られていた印刷所勤務から、親友のホンチュン（林于竝（リン・ユービン））が働く映画館の裏の一部屋に移り住み、オートバイ配達の仕事に就いたが、その後スクリーン上には大変なアワンの「失敗例」が登場してくるから、そんな本作中盤の展開に注目！もっとも、青春時代には、いくら辛いことがあっても時々アフィンに会うことができれば、それでアワンは幸せ・・・。

日本でも、孤独な都会暮らしを続けている若者たちには、盆、正月の里帰りが大きな楽しみ。それは台湾でも同じだが、アワンとアフィンの2人には毎年の里帰りは無理だったようで、最初の里帰りはアフィンのみだった。翌年の夏ははじめて2人そろっての里帰りができたが、その時父親たちは鉱山の待遇改善の要求を掲げてサボタージュを続ける闘争をしていたから、もはや故郷も安らぎの場ではなくなっていた。さらに、野外映画会の夜には、祖父（李天祿（リー・ティエンルー））がろうそくとまちがえて、爆竹に火をつけるという

事件も発生！そんなこんなのため、2人とも里帰りした故郷でのんびり骨休めというわけにはいかなかったらしい。そんな状況下では、アワンのアフィンに対する「愛の告白」もまだまだ・・・。

■□■「瑞々しい」と「不器用」、そんな形容詞がピッタリ！■□■

『キューボラのある街』の吉永小百合には「初々しい」、『ローマの休日』（53年）のオーディリー・ヘプバーンには「チャーミング」、『化身』（86年）で映画に主演デビューした黒木瞳には「可憐」、という形容詞がそれぞれピッタリだったが、本作でアフィンを演じているシン・シューフェンには、瑞々しいという形容詞がピッタリ。ちなみに、若い頃の桃井かおりや大竹しのぶが演じる若い女の子には「生意気」という形容詞がピッタリ！シン・シューフェンは決して万人が認める「美人」ではないが、私はこの手の顔が大好き。私が中高校生時代にスクリーン上で観た数々の映画の中で強く印象に残っている大好きな女優は数多いが、この手の「瑞々しい」という形容詞がピッタリの女優は、私の大のお気に入り。そして、この手の女優が演じる若い女の子は、口数が少ないのが特徴だ。

他方、田舎から都会に出てきた男女の恋の展開において、カッコ良くて会話も上手な男という例はゼロで、「不器用」という形容詞がピッタリの男ばかり。したがって、そんな若い2人の会話がスムーズに進まないのは当然だ。ちなみに、『誰が為に鐘は鳴る』（43年）で見た、ゲイリー・クーパー扮するロバート・ジョーダンと、イングリッド・バーグマン扮するマリアとの恋は、年齢差も恋愛経験の差も大きいいうえ、会話力も圧倒的にロバートの方が上だから、2人の恋は一方的にロバートがリードする形で進行していた。しかし、「瑞々しい」シン・シューフェン演じるアフィンと、「不器用」なワン・ジンウェン演じるアワンとの恋の行方はなかなか難しい。さあ、そんな観点から見た若い2人の恋の行方は？

■□■日本の青春映画との違いは、「兵役の義務」■□■

田舎から都会に出て暮らす若い男女の淡い気持ちは日本も台湾も共通だが、台湾には韓国と同じく「兵役の義務」があるところが日本と大きく違う。先日亡くなった、ボクシングのヘビー級王者モハメド・アリ（カシアス・クレイ）はベトナム戦争に反対し、勇敢にも兵役を拒否したが、それに対する国からの報復が大きかったのは当然だ。もちろん、アワンにはそんな思想性も勇気もなかったから、ある日突然送られてきた「兵役の通知」に従うことになったが、その時こそアフィンに対して愛の告白をする絶好のタイミング。私はそう期待（？）したが、残念ながらアワンにはその勇気もなかったようで、アフィンが心をこめて作ったワイシャツを受け取ったアワンは、愛の告白をしないまま台北駅でアフィンと別れることに・・・。

母親（梅芳（メイ・ファン））から父親（林陽（リン・ヤン））のライターを渡されて兵役についたアワンの下には、最初こそ毎日のようにアフィンから手紙が届いていたが、ある

時からアワン宛ての手紙が転居先不明で返送されるようになったから大変。アワンは一体どこへ行ってしまったの？さあ、それまでちょっとまどろっこしいものの、順調に育っているかに見えた2人の淡い恋の行方は・・・？

■故郷で今、アワンが思うものは・・・？■

本作は1989年に日本で公開され、同年のキネマ旬報外国語映画部門の第8位に選ばれた。1989年といえば、日本では昭和天皇が崩御された年で、現在ヒット中の映画『64—ロクヨン—前編』（16年）、『64—ロクヨン—後編』（16年）がターゲットとした年。そして、中国では「六四事件」＝「天安門事件」が起きた年だが、中国映画では張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコーリャン（紅高粱）』（87年）（『シネマルーム4』16頁参照）が第3位に選出されている。

そんな激動の年に、第10位に選出された同じホウ・シャオシェン監督の『童年往事 時の流れ』と共に、素朴な台湾の純愛映画が日本の映画ファンの心をとらえたわけだ。ちなみに、同年の日本映画のベスト1は今村昌平監督の『黒い雨』（89年）だし、ベストテンを見ても、かつての日活の青春映画のような甘く、懐かしい映画は1本もない。そんな時代だったからこそ、本作のような映画に共感が広がったのだろう。

しかして、本作の結末はある意味アワンにとってきわめて過酷なものになる。だって、アワンとの文通が途切れた後、アワンは弟からの手紙で、アワンが郵便配達青年と結婚したことを知らされたのだから。こんなことになるのなら、なぜあの時「告白」しなかったのだろう。アワンはそう後悔したに違いないが、今更それが無意味なことは当然。兵役の義務を終えた後アワンは台北へは帰らず故郷へ戻ったが、そこでホウ・シャオシェン監督が映し出す故郷の風景は昔と全く変わらないもの。そんな故郷の風景を見ながら、今アワンが思うものは一体ナニ？

誰もが懐かしくなる心温まる映画だが、同時に男にとっては大いなる切なさが胸にしみてくる名作に拍手。

2016（平成28）年6月17日記